

が合はぬ、山高、中折、シルクハット乃至は烏打帽の雜輩に至るまで、その昔悉く外國から輸入したものである、日本で發明したのはチヨン鬘ばかりだ。何程ビフテキやカツレッツを食ふ西洋人だつて、冬期夏帽子を冠るといふ法はあるまじ、横田の君俺をかついだに相違ないと感付いたから、然る外國通に質問してみた、すると其の返答に、

（そりや廣い外國なもの、そんな人も有るだらう。日本だつて左様ぢやないか、よく書生が寒中單衣物で歩いてるだらう。）

だから横田君が外套を着ないのだつて、矢張り何國かの外國風俗（多分南洋邊の）なのだらう、と思つてゐる。洋行歸りの中には、倫敦

の雨季に東京でオーバーシューズを掛けようと云ふ猛烈なのがある相だから、機田君などは未だく平凡な方である。

◎ドモモ忙しくつてね

横田君の姿を見ると同時に、不圖俺は好ろしからぬ考を起した。それは此の男を捕虜にして、電車の空くまで此處で、無駄話をして居ようといふ計略である。で俺はつか／＼と五六歩出迎へて、ピヨコンと一つ頭を下げて、

「やア横田さん、久し振りでしたね。」

とやると、横田君は帽子を上へあげて（頭を下げたのではない）、

「やア。」

占めた、さア是れで雷が鳴つても、電車の空くまでは放さぬぞ。俺は陰でこそ横田君と友達扱ひにしてゐるけれど、否往々にして其の君をすら節約することがあるけれど、面と向へば必らず横田さんである、さん附にして彼れの代議士たる自尊心を傷けないことに勉めてゐる。事情若し之れを要すれば、先生と呼ぶことをも敢て辭せぬのである。是は敢て我が縣選出代議士横田君に限らん、諸君後學の爲めに試みて見たまへ、ごこの國さの代議士だとても、先生と呼ばれれば、その人侏儒でない限りは必らずグツとふん返り返つて、

（君、遠慮なくやり給へ。）

と云つて、卓子の上には敷島の出でゐるに拘らず、更に隅棚から金

口か葉巻の箱を取出して、諸君の前に置くこと請合である。彼んな成上り者を先生だなんて、チエ俺の估券に關はるなど、客つたれた自尊心に囚はるゝべからず、蓋し處世に巧みなる者の採らざる所である。諸君が床屋へ行つて、入念に髻を當らせる手段として、

（イヨ大將、近頃莫迦に景氣が好いね。）

とやつたからとて、何も彼れを陸軍大將として尊敬してゐる譯ぢや無からう。大將にも種々あるからネ、青大將に新馬鹿大將、同じ將軍でも乃木將軍と葦原將軍は、一緒にやならない。但こんな事は餘計な口。

横田君は妙な一つの癖を持つてゐる、それは人の顔さへ見れば、ヤ

何うも忙しくてねと云ふのである、何等國家・社會に害を及ばさない上品な癖である、俺の如く何でも眼に入るもの、耳に入るもの悉くを、貶し付ける癖なぞ、甚だ怪しからぬ癖である。今日も屹度その「忙しくて」が冒頭であることを豫期した、果然！

「山縣が重患だツてね、一寸見舞に行き度いんだけれど、何しろ忙しくツてね。」

とお出なすつたり、是をきつかけに話題は暫らく山縣大御所の噂で持切つた。横田君は好んで公の病症に就て語ることを欲するもの、如く、俺は單だ無駄話を繼續してゐることに依つて、其の目的を達するのだから、話題の何たるを選ぶ所でない。勢ひ二人は夕刊の復

習をやることになる。横田君は、

「僕が先月の十八日に小田原へ行つたときは、ビンビンして居たんだに。人て分らぬものだね。」

と云つた、俺は夕刊の記事に『二十日頃より發病』とあつたことを想ひ出した、横田君の言ふ所方に符節を合せてゐる、だから俺は横田君が十八日に山縣公を訪問したことは事實であらうと思つた、だから、

（此の男は山縣公と懇意なのかしら、偉いんだなあ。）
と感心した如き顔をして置いた。今度は俺が發言した、

「然し大した熱では無さ相だね、三十八度幾分と云ふんだから。」

横田君は直ちに反対意見を提出して曰く、

「大熱だよ、彼の棒鱈の如きコチ／＼した老體に、三十八度何分は高熱だよ。」

成る程一理ある言である、俺は直ちに附和雷同して、

「それも然うだ、摺餌でつないである寒巖枯木に、三十八度何分は或ひは最高熱度であるかも知れない。して見ると今度は愈々正一位になるのかね。」

と云ふと、横田君は卒然、驚愕措く能はずてな態度を以て、大きな掌を五六遍もハタハタと横に振つた、恰も溢團扇で七輪でも煽ぐやうに。

「今、親父に逝かれちや大變だ、僕の計畫が滅茶々々になる。死ぬものか、大丈夫だよ、親父の身體は元來が養生に依つて持つてる身體だから、存外あゝいふのが持久力に富んでゐるものだ。」

と否定するかと思ふと、又、

「然し何と云つても八十二歳の高齡だからなア。」

と長大息する、山縣公を親父々と呼ぶ者は、世の中に前朝鮮政務總監ばかりだと思つたら大に違ふ。各派の代議士ども、如何な陣笠だつても、元老又は自黨總裁からは恰も一人息子の如くに親愛せられ、時の大臣諸公とは兄弟分の交はりを結び、院内總務乃至幹事長を親友に持たない者は有りやしないのだから。

◎妙な病氣の代議士

矢張り俺の知つてる代議士で（俺も大分代議士を友人に持つてるだらう？、少しカブレたかな）、江口といふ男がある。文士から代議士になつた男である。此の男待合へ行くと極つて幹事長へ電話をかけさせるといふ變な病氣がある。

（お玉さん、濟まないが一寸電話をかけて呉れ、憲政會本部へかけてね、幹事長を呼び出してくれないか。）

其の待合が生憎にも、俺の行く待合と同じ家だつたものだ。も一つお生憎なことは此のお玉君なる女が、そんな他愛もない事でへボ代議士から脅やかされる如なお目出度いんぢやない、知事さんでも社

長さんでも、苟くもお客と名の付くものは悉く揉みくちやにして、屑籠へ放り込むことを得意としてゐる女である。

「多さん一杯下さいな、熱いのを。」（と云て入て来た）

「階上へ来たのは江口ぢやないかえ！」

「然う、騒々しいから直ぐわかるでせう。」

「アハハハ、電話は？」

「最早ちやんと伝付かつて来たの、藝妓が来れば屹度一度づゝはお極まりなんだから、煩さいわねエ。」

「關ふことたない掛けた積りで居らッしやいませんを喰はせるサ。」
「そこに如才はありませんよ、第一呼出される方だつて迷惑至極で

せう。」

お玉君暫らく油を賣つて出て行つたから、電話室へ行くのかと思つたら其のまゝトントントンと二階へ！。

然し世の中には、這麼よろしくない女ばかりは居ない筈だ、「幹事長を呼べッ」「ハハッ」と大汗になつて電話を掛ける女中も居るから、江口君未だに此の病氣がなほらない。ぐるりと舞臺が變ると此處は憲政會本部の幹部室、幹事長の富田幸次郎君碁を打つてゐると知るべし。

「然らば憊う行く、粘ぐか、其處で立つ……む可けない四目點か。」など、夢中になつてゐる處へ、「富田さん、江口さんから電話と」給

仕がやつてくる。富田さん苦い顔をして、

江口の奴又待合へ行つたナ、煩さい男だ。始終俺を電話口へ呼び出して、何を言ふかと思へば、總裁の家へ行つたら例の件を大層心配してゐたよ、それから例の件よろしく頼むよ、明日は例の件で大臣とこへ談判に行くよ、そんな事はかり云つてゐる、彼の男彼れで氣は確かなのかい。俺はもう疾づくに歸つたよ。」

嘘のやうな眞實の話。然し我が敬愛なる横田君を此の江口君と一緒にしては、氣の毒だよ、俺の縣の代議士だもの。

◎物の賞め方

俺と横田君との會話に戻る。

「先日の貴下の演説は、實際、近年の傑作でしたね。」
横田君はニタリと笑つた。

「や、君あいつを傍聴して居たのかね。」

正直にしろよ、正直ほど尊いことは無いって、如何にそれが我々の尊敬するお釋迦様の教だからって、見すく社交上の治安を妨害するやうな言語は、慎しむべきであると思ふ。そこで俺は、

(否、ほんの五六行新聞雜報で讀んだだけなのだ、而も雜觀子が大分冷評して居たねエ。)

と云ふ代りに、

「相變らず警句の續發で、咳唾迸つて珠を成すの概がありますね、

何うしてア、いふ風に文章的に言葉が出て来るんでせう。然し彼の痛烈な警句も議員中之れを解する者幾何ありやと、思ひ一度び此に至れば、甚だ心細い。」

と臆面もなく賞め千切つて置いて、終りに臨み搦手から一本、

「貴下は、代議士は皆な自分と同等位の學識あるもんだと思つて居るから可けない、忌憚なく云へば未だ修業が足りないですね。」
と喰らはせた。俺は知つてる、斯様な場合には假令(莫迦だなア君は)位の言葉使ひをしたとしても、決して對手の憤激を買ふものでないことを。

「あツはツはツ、イヤ修業が足りぬかも知れん、反對黨の奴等がガ

ヤガヤ騒ぐ時は、大抵此方の論旨の呑込めない時に限るやうだものね。今後大いに研究しよう。』

横田君は早速俺の忠告を納れて呉れた、度量洪大太平洋の如しである。(最早大分電車も空いたやうだ、ドレそろそろお暇にしやうか)と思つてゐる時、横田君は直衣のポケットから、金時計を出して見て、

「何うだね急がなければ、晚餐につき合ひ給へ。全く久しぶりだ。」
久し振りだは好かつたね、如何に久し振りだからツて、曾て晚餐なご御馳走したことのない男である。これが二三年前の俺だツたら、
屹度、

(君は非常に忙しいんぢやないか、俺と一緒に晩飯なぞ食ひに行く
閑なぞあるのかい。)

と皮肉つたに相違ない。何のその晩餐くらゐ、棒に振つても痛快かつたに相違ないが、おもんみる所あつて翻然、巧言令色、仁少しの方へ宗旨替の今日ぢや、オーライとばかり直ちに同意を與へた。宏大なる哉お世辭の徳やだ、然し考へて見れば晩飯くらゐは御馳走になつてやる権利があるかの如くに思はれる。何故つて人を賞める位世の中に難事はない、俺も此頃でこそ大分賞め方が上手になつたけれど改宗當時の未熟時代には、人を賞めて却つて怒られたものだ、初めて丑の家を訪問した時だつて然うだ、妻君の御機嫌を取つて置

かないと今後來ても御馳走をしないだらうと思つたから、大いに智惠を絞つて、

（奥様はお買物がお上手ですネエ、殆んど天才的だ、安くツて體裁の好い道具ばかりお揃ひです。愚妻なんか高くつて氣の利かない品ばかり買つて來て、お話になりません）

と云つたんだ、すると何うだらう、ゲジトくのやうな眉がピンと逆立ましまして、（其時俺はオヤ此の女は怒つた時の方が美人だと思つた）

（お宅と違つて、私の家は貧乏なんですから、仕方がありません。）だから〇の處へ行つた時は、その反對を用ゐて、これなら大丈大ウ

イスキーくらゐ出るだらうと思つたんだ、

（お宅の品物は、金は相當に出てゐるやうだけれど、ろくな物はありませんね、愚妻なんか安くつて體裁の好い物ばかり買つて來て困ります。）

すると令夫人は急に風船玉みたいな顔をして、

（妾なんか天性莫迦なんですもの、逆もお宅の奥様のやうに御器用には參りませんよ。）

語尾に力の入つたシツカリして御聲である。ちやア何て言つたら好いんだい眞實に。然し匠の處では大成功だつた。貴株は飽迄家財道具に獅噛みついてゐるから可かん、亭主に對しては其の妻君を、

妻君に對しては其の子供を賞めるに限るつて教はつた、で今日は一つ子供を賞めてやらうと待構えてゐたン、處がKの子供と來ては始末にいけない、面は母親そつくりだし、行儀と云つたらお客様の前に立はだかつて焼芋を噛じるし、學校は尋常科の分際で落第したと云ふ噂だし、最早萬已むを得ずして、

(坊ちやん、お丈夫さうですなア。)

とやつたんだ、すると妻君ニンガリ笑つて、

(お蔭さまで、未だ藥の味つてもものを存じませんで、何より仕合せでございます。)

オヤ／＼その何よりは二の矢に此方から呈上しようと思つたんだに

魁けられてしまつた。だから人を賞める苦心といふものは、並大抵ぢやない。

閑話休題々々々々、そら横田君が、

「何處が好いかね、餘り遠くない處でと……。」

と早速首を傾げて、洋杖で靴の尖を叩いてゐるではないか。茲に於て俺は急に氣を揉みはじめざるを得ぬ、蓋し利害關する所大なれば也だからである、此處ら邊で晩飯と云へば、それ何處が好かんべえか、みどり屋か、然らずんば素人料理の野田家か、それとも香雪軒と洒落れるかしら、「遠くない處で……」の後に「お手輕に」が潜伏して居さうだつたから、そこらは御縁が無かり相だ、松本は酒が悪い

から御免蒙むりたいね、寧ろ金六亭に如かずだね、先づこゝいらが柄相當と云ふ處だらう、天金は安直すぎるよ、カフエライオンなんか助からないナと窃かに頭を悩ませてゐる時、突如として、何の豫告もなく、極めて不意討に、一大事件が持ち上がった。

◎鼻眼鏡の宙返り

横田君は「あッ。」と叫んで、一尺ばかり飛上つたかと思ふと、双手を舉げて其の頭を掴んだ。然し横田君は決して、公衆の面前に其の年齢に不似合なスコ禿の頭を曝露して、見物を唸らせようなんといふ茶番氣があつたのでないことは解つてゐる。疑ひもなく、風に渡はれんとする中山を抑さへたのであるが、帽子は間一髪の差を以

て巧みに飛び去つてしまつたのである。俺が辛うじて此れだけの事實を認知し得た次の瞬間には、横田君はキリキリと、四五六遍も、俺の先祖はまい〜つぶらだよつてな顔をして、でなくば彼れが高麗鼠の申し子であることを誇るが如くに、グル〜と廻りながら、「君、君、見てくれ玉へ、銀鏡が飛んだんだ。」と絶叫した。乃ち横田君の躍り上つた機會に、金縁の鼻眼鏡が彼の鼻間から無断でエスケープしたことがわかつた。而して俺はそれが容易に起り得べき事件だと思つた。何故ならば元來横田君の鼻と其の鼻眼鏡とは、仲の悪いつてありやしない、始終互ひに口ぎたなく罵り合つてゐる。畜生ッ、尻輕の不貞腐れ奴、出てゆけッ」と鼻の

奴が怒鳴ると、眼鏡の奴は又、(出て行かなくって、お尻がこそぐつたくつて、一時間と座つて居られるもんか)とビヨンと駆出す。だから横田君は平素からして、氣の毒なほど眼鏡に對して氣兼ねをしてゐる。眼鏡の一番嫌ひな事といふのは莫迦笑ひ、豪傑笑ひの類である、處で生憎なことに横田君が又、その豪傑笑ひて奴が大好きなんだ(尤も是は單り横田君には限らない、代議士と有らう者は皆多少此の嗜好を持つてゐる)だから注意深く觀察するのに、横田君の豪傑笑ひたるや、肩こそ大袈裟に揺すぶるけれど、首から上の安定を破るまいとして、その顔ッたら有りやしない、俺はつくづく、代議士なんかになると人知れぬ苦勞のあるものだと思つた。それで尙

且つ眼鏡の奴は、屢次憤然鼻梁を蹴つて、眞逆様に墜落すること、宛ら我が國の飛行機同様である。矧んや只今の場合の如きは、横田君自身が空中に飛び上つたのであるから、鼻眼鏡君得たりや應とばかりで、スミス以上の妙技を揮つて、宙返りをやつたに相違ない。で、俺もあ突合に二三遍高麗鼠をやつて見たけれど、不思議だなア皆目行術が知れない、知れない筈だ、眼鏡は紐に足を縛られて、横田君の胸の邊でブランコしながら、舞踏をやつてゐる。「アハ、慌て、居るもんだから。」と苦笑して、横田君今度はクルリと方向轉換をやると、猛然として帽子に向つて突進した。

◎飛ぶ、飛ぶ、帽子が風に

帽子は此の隙に電車の線路を越えて、向ふ側をころ／＼と、止め手の無い限り何處までも……、箱根山白絲瀧の中までも行く氣である。帽子の中で一番轉がりつ振りの好いのは、蓋し山高に如くはない、風の奴も亦これを知つてゐるから、吹飛ばすときは屹度山高に限つてゐる。尤も風が此の山高を好んで吹飛ばすには、他にも一つの理由がある、それは山高をかぶる者は、中るも中らぬもの八卦屋君を除いては、兎も角も紳士と名づけられる、種類の人間に限つてゐるからである、何故ならば、小僧と烏打帽、乃至又書生と中折帽との取組の如きは、毫も見物人の喝采を博するに足らぬからである。

中山は横田君の突貫して來るのを見ると、急に速力を早めて一散に駆出した、横田君が速力を早めれば早める程、中山はいよ／＼一生懸命である、殊に意地悪く泥濘を選つて、轉げ込んで居ることが、誰の眼にも判然と讀める。俺は思ふに、斯麼ときは決して帽子を追駆けてはいけない、(要らんよ、追駆けないよ、そんな古帽子なんか。丁度新しいのを買はふと思つてゐた矢先だもの。)てな顔をして、兩手をポケットへ突込んで横を向いて澄まし込んでゐるに限る。すると中山の奴、(なアンだいな詰らない)と、大道の真中へ座りこんでしまふに極つてゐる。お天氣つて云ふ奴が矢張り左様だ、今度の日曜に何處かへ出かけようと計畫して、二三日前から「てる／＼坊主」

を七つも作つて、木の枝に吊下げて置く、當日は極つて雨だ。(折角の日曜に、誰が外へなぞ出かけるものか)と澄まし込んで居て、當日急に思立つたやうな態にして出かけるに限る。

人を嘗め切つたやうな中山の態度に、横田君の眼は昂奮の光に輝き、其の顔面筋肉は極度に緊張して居た。演壇に立つて「諸君、本員は」の比ではない。而して夕刊賣の小僧を突飛ばし、電信柱とコツンコしてゐる間に、突然横合から小犬が飛出して、物をも言はず中山に躍りかゝり、難なく取て抑へて口に咬へると、一散に駈出した。見物は手を打つて嘩し立てた。好くない心掛である。横田君は今度は猛然としてボチに突貫した。ボチは散々翻弄つた後、而して金の

洋杖で強か背中をドヤシ付けられた後、謹んで中山を其の所有主に返納して、奴さん今日は先づ〜光陰を徒費しなかつた位に考へて、ケロリとして横田君の後姿を見送つて居た。

「や、それぢや失敬。」

横田君はブンブン怒つて行つてしまつた。「それぢや」てのは一體何の意味だい、薩張り譯がわからぬぢやないか。俺は折角の晩飯を吹き飛ばされちまつたけれど、お蔭さまで一の偉大なる発見をした、それは男子恐らく帽子を追駈ける時くらゐ、眞摯絶大なる満身の努力を傾倒する事は無いといふ事實をである。

白石と黒石

◎壽司は立ツて食ふもの

廣重の五十三次名所圖繪によつて、日本橋はあゝ云ふ物と承知して居ると、大きに違ふ、日本橋は橋ではない、道路である。長さよりも幅が廣い。欄干にはメンチを踏まへた麒麟が居る。聖人の生るゝ時だけしか、此の靈獸は出ぬものと相場が極まつてゐたが、此の様に銅像を幾つも造つて置けば、容易に壊れたり失せたりする心配が無いから、何様暴政を行ふ政府が出来ても、麒麟は家内眷族を率ゐて其の徳化を反對に裏書する譯である。尤も今日の如に、代々の

總理大臣が堯舜そこ退けの徳政を布くからには、麒麟も一々出たり隠れたりする面倒を省く爲に、斯うして始終メンチを踏まへて居るのであらう、と考へつゝそろり／＼參るほどに、早これは魚市場である。俺は一度そこで壽司の立食ひをやつた経験がある、その話だ。壽司は東京の自慢もの、しかもとれめを魚河岸に刺すとある、然し茶舞臺の前に胡座を掻いて食べるのではない、立食ひである。その立食ひが少々つらい、俺が紳士だつてことは諸君は既に屢々聞いてゐる筈だ。肩へ手拭を引かけた威勢の好い阿兄が、紺の暖簾へ角刈の頭を突込んでゐるのは誠に對照の好いものだが、洋服に山高でバクつくなんかは、格好がよかありませんからね、先づ色女なぞに見

せべき圖でない。然ういふ時に限つて屹度、十年も會はなかつた昔
 馴染に出會すものだ、でなければ一年に一遍より外出しないと云ふ
 隣家の妻君に出會すか、兩つの内何方か一つは外れつこない。
 と云つて、頭髮を角に刈つて、印袴天を着て、麻裏を穿いてと、手
 敷のかゝった扮装も出来ない、諸君然ういふ時は友人を引張つてゆ
 くに限る、

(誘はれたから、友達の義理で已むを得ず。)

お互ひに其麼顔をして居れば申譯は立つ。友人など云ふものは斯
 麼時より外に、餘り用のないものだ。だから俺は玉を引張つて一緒
 に行つたんだ。

大きな湯呑に、なみくと茶を注いで出した。一口咽喉を濕して置
 いて、さて愈々壽司へ突貫するんだが、抑も茶を飲むに茶禮あり、
 酒を飲むには酒令あり、飯を食ふには右の手に箸を持ち、道を行く
 には左側を通る。すしを食ふにも矢張り食ひ方がある。乃ちすしを
 取るには三本の指で向ひの端を摘まむ、而して手前の端に醬油をつ
 ける、こゝまでは肱を上げてやらぬと巧く行かんが、是で肱を下げ
 ると、それ槓杆作用に依つて壽司の方が上がる、同時に壽司はグル
 リと一つ宙返りをやつて、魚は下に飯は上を向く。乃ちバクリとや
 る。隅にある濡れ布帛で指の突を拭く、尤も是れは嘗めてしまふ者
 もある。

此の法式を心得ぬ田舎者は、屹度アペコペにやるから妙だ。臑を上げない、だからすしの手前の端を摘まむことになる、だから醬油は向ひの端へつける、だから飯が舌に當つて魚は上あごにつく。これで壽司の味ひがわかつたら奇蹟であらう——てな事を仰在りますが、實は俺も長い間上願ですしを食つて居た組である。

「阿父や、學校の先生がさう云つたよ、立食しちやいけねえつて。」俺の隣りに立つて、キョトくと四方を見廻しながら、敢て先生様の御教訓に背いてゐる茶目公は、如何にも良心の苛責に堪へぬものゝ如く、そつと親父にさゝやいた。俺は胸に二寸釘を打たれた位に、ギクリとした。

「ちやア何うして食ふんだい」と思なる親父公は反問した。

「往來を歩きながら物を食べては不可いッて、家の中でも突立つたまゝ、お菓子を食べるんぢやない、ちやんと座つて食べるもんだッて、左様云つたよ。」

俺は又もやギクリシヤツクリ、三寸ばかり繼ぎ足して打こまれたやうな氣がした。俺だつて學校の先生から、其の通り教はつたんだもの。

然し愚や愚や親父は、一寸もギクリとしない。耳まで裂ける如な大きな口をあけて、白痴のやうな笑ひ方をして、

「アハ、山出しの教員がろくな事を教へやがらねエ、すしとおでんは立つて食はねえで何うして食ふんだい。先生様にさう云つてやれ、辰の家はな瘦せても枯れても七代傳はる江戸ッ兒でさあツてな、割箸ですしを挟んで食ふやうな、悪いことを教へちやあ先祖の御位牌に濟あねエツて、阿父が左様言つたつて。なあ。」
而して有らうことか有るまいことか、俺の方を振返つて、

「見ねエな、洋服の紳士だつて、矢張り立食をなすつてるぢやないか。ねエ旦那！」

其の状恰も俺に共鳴を強ふるもの、如くである、見も知らない赤の他人に御迷惑を相掛けるとは不心得な奴である。俺はKを振返つ

た、斯種の應對は奴に譲つて置く方が適當だと考へたからである、然るに奴は地の利を占めて（Kと愚や親父との中に俺が挟つてゐるのである）横を向いて知らぬ顔の半兵衛を極め込んでゐる、するいぞく。

仕方がない故俺も莫迦笑ひを一つやり、

「アハ、こりや手厳しいね。」

てな事で責任解除を願はふと企てたが、敵の追及更に急、

「旦那に聞いて見る西洋の宴會では立食と云つて、本式の儀式となれば皆な立つて食ふんだ、立食も立食も一ツ字で一ツ事だ。立食が悪いなら、西洋の宴會に行く紳士や貴婦人方は、皆な先生に吐

られなきアならないぢやないか、ねエ洋服の旦那。』
さう洋服々々ツて言ふなよ。

◎洋服黨の心理

然し考へて見れば、愚や親父の言ふ所にも、痛い點がある。俺は中山を被り洋服を着てゐるのが恨めしい、さう云ふ階級に屬する人間であひことが辛い。眞實を吐けば俺も壽司の立食は大賛成である、割箸で挟んで食べたか無いんだ、一升七・八十錢もする日本米は御免蒙むつて外米にし度い。三十圓の家賃は御免蒙むつて七八圓位で済ませ度い。然しそれが出来ない、洋服と山高との手前である、時にはシルクハットといふものをも冠ぶる手前である。

町役場で白米廉賣券を配つたとき、俺は、そんな物を俺の家へ持つて來て見ろ、

(な、な、何だと思つてゐる、失、失敬な。)

と頭から怒鳴り付けてやる心底であつた、然るに幸ひにして斯かる侮辱を受けずに済んだ、

(へッ、矢張り俺を紳士として待遇してゐるんだぞ、可愛奴々々々。)
だから高田市の舊士族連が、同盟して廉賣券を謝絶したといふ新聞を讀んだ時だつて、

(莫迦だなア貴様達は。そんな心掛だから生涯貧乏するんだ)
と心の中では冷笑しながら、口では男子須らく此の意氣が無ければ

可かん、恵まれて食はんより寧ろ餓死すべしサと、大にその古武士
 的態度を賞讃し、我國の武士道未だ廢れずてなことを言つて居たん
 だ。斯るが故に然るが故に、譬へ腹が空いても涎が垂れても、到底
 奴等の眞似は出来ない、洋服を着て傘などが持てるものか、門のな
 い家なんかに棲めるもんか。此の苦しみは俺獨りのものではない、
 山高を戴き洋服を着てゐる者は、今や悉く此の苦しみに惱められて
 ゐる。

その代り俺は、俺と同等若しくはより上流の社會の人間のやる事
 なら、何でもやる、就中立食の宴會に皿と小刀と肉刺とを持つて、
 群がる有象無象の中央に突貫して、よぼ〜紳士を肱でゴツキ廻し、

織絹花の如き淑女も物かは厭と云ふ程足を踏にちつて置いて、コー
 ルピフを七片、ハムを五片、サンドキツチを八片、其の他サラダ、
 ブウディング、林檎、バナ、に至る迄、小山の如く積上げて凱歌を
 奏する如きは最も得意とする所である。然れども川崎大師の餅撒き
 に、彼等下等社會の人間共が、僅かに一片の餅を獲むとして、躍り
 狂ふ醜惡なる光景を目撃する時は、吁然として呆れ、慨然として歎
 する。俺は熱心なる人類無差別論者たる點に於て、世界の如何なる
 名士にも譲らない、然し若し人あり、俺に妻君を世話するとして、

「印度人だがね、印度人としちや無類の美人だ、君と並べたら、屹
 度好一對の夫婦だよ、貰ひ給へな。」

てな事を言つたら、俺は突然其の男を撲り倒すに極つて居る。

◎仕掛は屋臺の裡

俺が腹の中で、こんな大戦争をやつて居る間に、件の愚や親父は金を拂つて小供を連れて立ち去つた。ひそかにその勘定振りを窺ふに、鮪・小はだが四錢、海苔巻が三錢の割合らしい。高いなア、さうと知つたら十も食べるではなかつたのに。

「ちい、勘定だ。」

「へえ、有難うござえやす、お幾つで？」

「鮪が五つ、鐵砲が三ツ宛だ。」

Kが然う云つた、俺は勘定が違ふと思つた、俺でさへ十食つたん

だもの、Kが六つしか食はぬと云ふ、そんな奇蹟的事件は有り得ない。で、それをKに注意しようとする、Kの奴イヤて程俺の横ッ腹を脇で突いた。ウームと云つて俺は黙つてしまつた。

「左様ですかえ、エ、と……、かうツと……。」

俺は此の爺さん算術は拙手だなと思つた。四五の二十に三三三が九、めて二十九錢の二倍五十八錢譯あないぢやないか。

「エ、と七十二錢戴きます。」

「違やしないか。鮪が五つ海苔巻が三つ宛だよ。」

「えへ、今日は鮪が高けえだから。」

と済ましたものだ。俺達は此の老爺が人を見て、すしの代價を二三

にするのを怪しからんと思つた。然し多寡が五錢か十錢だ、乞食に呉れてやつたと思へば濟む（大きな事を云ふな、壽司の數を胡麻化した癖に）と、七十二錢支拂つて出た。俺達は紳士なんだもの。

途中俺とKは勘定をして見た、眞實は鮪が六つ海苔卷が四つ宛、四六の二十四、三四の十二、べめて三十六錢の二倍は七十二錢……。」

「おやッ、老爺知つてやがつたかな。」

此の話をしたら、さる通人笑つて曰く、

「そりや君駄目だ、屋臺の下に碁石が置いてある、客がすしを頬張る毎に、白石と黒石とを區別して、老爺ちやんと勘定してゐるのだ、而して君達みたいな客が數を胡麻化せば、直ぐエへ、と愛嬌

笑ひをして、鮪の値を上げるのだ。」

さては通人、君も經驗があるな。

從軍記章

◎開けるぞ、最敬禮オーイ

麼う見えても、(諸君に麼う見えるか知らんが) 俺は從軍記章を持つてゐるんだぞ、見損くなつて貰ひたくないものだ。抑も從軍記章と云ふものは、藝妓と珍婚旅行をやつたり、壽司の立食をしたたり、高利貸を胡麻化して金を借りたりしたつて、それが如何に手際よく、鮮かに行つたからとて、決して戴けるものでは無いんだよ。そりや俺も平常は随分莫迦を悉してゐるサ、自分ながら呆れて『何て馬鹿だらう、貴様は』と罵倒することがある位なもの、然しながら底は

日本男兒だ、一旦緩急あれば義勇公に奉じ、ペンを劍に代えて起ち、ポケットに(此の衣囊平素はキャラメルが入つてゐる)短銃を捻ぢこんで、滿洲の果でも西伯利亞でも、突貫して行く覺悟と勇氣を持つてゐる、伊太利の文豪ダヌンチオ其處退け俺が出る——と云ふ勇士だ。口先ばかりぢやない、此處なる一個の從軍記章、これが物言ふから仕方があるまい。

頃は 大正三年夏の末、門司の港を船出して、指して行衛は 勞山灣、先づ此の船の中で小間物屋を押開ろげ、水も飯も咽喉に通らばこそ、死ぬるか生きるかの境を彷徨すること四十と何時間、これを手始めとして硝煙彈雨の裡を馳驅し、雨に浴みし風に梳り、隆暑を忍び祈

意である。但その次にある文句が一寸氣に食はない、ナニ何でも無いんだだけだ、

此證ヲ勘査シ第十三萬六千二號ヲ以テ

大正三四年從軍記章簿冊ニ記入ス

賞勳局書記官正五位勳四等 藤井 善言 印

その十三萬六千二號が一寸氣に食はない。(一體全體彼ればかりの戦争に、十三萬六千なんと云ふ人間が從軍したのかい)と一驚を喫し、その多數の中の一人に過ぎぬと云ふ事實が、少々俺の威嚴に關する如な氣がした。次で、

(此の十三萬六千二號と云ふ數は、全體お尻から何番目に當るんだ

50)

とソツと劍突を食せてみる、而して何といふ理由はなく、それが二番目である如く思はれた。それが何うも怪しからん話だテ、第一號が神尾中將これは仕方がない總大將だから、第二號が參謀長の山梨少將、それから堀内少將山田少將、渡邊とか云ふ重砲の親方の少將も居たつけない、次に磯村參謀、久留米の加藤聯隊長佐賀の長堀聯隊長、林高級副官にヒヤーズ參謀(此の二人は少佐だけれど俺達と最も深い交渉を有した人達だから特に記憶してゐる、ヒヤーズと云ても英軍の士官ではない、ヒヤーズとは蝸の支那語なんだ、俺の知つてるのは先づ此位のところだ、此の中へ海軍から少し割込んで來

るとしても、何う考へたつて俺の從軍章番號は六十八番か、若しくは六十七番邊の處なんだが？、可怪しいなあ。兎に角疑問は疑問として、斯麼ことは妻君や妹に進んでは話さぬ事にした、若し聞かれたら、(イロハ順だらう、イの字だのハの字の付く奴が莫迦に澤山居たやうだから)てな事にして、形付けて置く心底だつたが、女は頭が悪いね、何とも氣が付かぬらしく、

『早く其の眞物の方を見せて頂戴、さぞ立派でせうね。』
と専ら先を急ぐ。そこで俺は愈々その黒塗の小箱を取つて、

『可いかね、開けるよ。』

手品だとピストルを一發打つ所だけけれど、内輪同士の事ゆるそれ

程仰山なこともせず、バツと蓋を明けた。ビカーリ、と金色燦然眼も眩むかと思ひきや、思ひきや更に光らない。

『是れ？……。』

妻君と妹は再び感に入つた、が先刻御紋章と大きな判とに感じ入つたのとは、少々入り方が違ふらしい。而して曰く、

『二錢銅貨みたいだわネ。』

だと、俺は誰の考へも同じ事だナと思つた。然り誰の考も同じことだ、自分の考へる時には人も矢張りそれを考へる。何でも此の『考へ』と云ふ奴は、肺病の微菌みたいなものに相違ない、空氣中をフワ／＼と飛んであるいて、誰にでも飛つくらし。二三年前の事だ

が、俺は或る本屋から『汽車の窓から』といふ書物を出版する事に
してゐた處が半分ほど原稿の出来上つた頃、同じ名の書物が他から
出た、丁度其の頃松崎天民君が『温泉めぐり』を書いてゐた、する
と何うだらう矢張り同じ名の書物が、(お先に失敬)とも云はないで
博文館から出てしまつた、天民君は『温泉巡禮記』と改題して出し
たが、俺は中止してしまつた。今度も俺は『君と寝ようか五千石と
ろか』と云ふ表題で、さんざつばら我が情人とん子嬢とイチャつく
積りで居たところ、奥野他見男君にしてやられた、それ故内容を少
し入替えて『お釋迦様でも……』とする事にしたのだ、然しこれだ
けは安心だ、何故つて是ばかりはお釋迦様でも御存知ないんだもの、

他見男さんに氣の附く譯あない。

誰の考へも同じだけれど、又何ぼ夫婦の間とは云ひながら、俺が
忠義と勇氣の結晶を捕まへて、二錢銅貨たあ慘酷だと思つた。何と
か外にも少し上品な譬へ方はないのかいと憤慨した、然し矢張り誰
の考へも同じことだらう、この俺でさへ名案は浮ばないんだから。

◎記念撮影中止

『妾、お茶を淹れましたからツて云つて、隣家の奥さんを引張つて
来て、見せびらかせようと思つたんですけれど、これちや考へも

のだわネ。』

と妻君頗ぶる悲觀し始める。俺は、

「だけれど、此の綬が綺麗ぢやないか、金鷄勳章のと同じ地質だよ、加之に色合が旭日章のよりかも高尚だ。」

と慰めた、然し彼等は單に「然うね、ジミな色だわね。」と云つた限り、敢て深く感服はせぬ面色である。俺は時が悪い哩とあもつた、と云ふのはつい四五日前三人で銀座へ買物に行つて、歸りにぶらぶら歩きながら、芝の櫻田本郷町までやつて來たんだ、すると彼處に勳章屋があつて、飾窓に勳章の模型が陳列してあつた、金鷄勳章、旭日章、瑞寶章、寶冠章、凡そ勳章と名の付くものは、二錢銅貨を除いては何でもあつた。「綺麗だわネ」立派ねエ」と交り感嘆の聲を放つてゐた、中でも眼を引いたのは勳一等桐花章の大綬であつ

た、何といふ色か、俺は彼んな複雑な色の形容は御免蒙りたいが、兎に角非常に華やかで且頗る上品なものであつた。つくづくと是れに見惚れた末に、何事をか宣ふと思へば、

(まあ綺麗だこと、伊達巻に好いわネ)

と仰在つた先生達である。従軍記章の綬に驚ろかぬとて、不思議はなす。

「これ如何時に吊るの?」

「冠婚葬祭其の他公會の席に出る場合……。」

俺は一寸偉らさうな顔をして見せた。

「是非吊げなくてはならないものなの?」

罰金を取られないなら吊げない方が好いつて云ふ意見らしい。これで早速偉らさうな顔は形付けてしまつて、

「ハッキリ然ういふ譯でもないが、元來は吊げる爲に下すつたものだ。」

曖昧なことにして、餘裕を保つて置く。然し俺一個人に取つては、飽くまで貴重な記念品である、想ひ出多き記念物である、子々孫々に傳へて以て家寶とすべきものである、何は兎もあれ、これを胸間に飾つて寫眞を一枚撮つておくと云ふ事に一決した。服装は従軍當時の服装が好いとおもつた、詰襟の服を着て、カーキ色の巻脚絆をつけて、雜囊と水筒の掛革を胸へ十文字にかけ、双眼鏡を胸半に

吊り、腰にピストルを吊る、この拳銃が一番肝腎なんだ。俺は何でだか拳銃と云ふものに非常に趣味を持つてゐる、一寸吊げて歩いて見なくて堪らん、従軍する時だつて東京から武裝して出かけたんだ、一番後の寢臺車から中央の食堂車までは、三つ四つの客車を通つて行かねばならない、車中の視線は悉く此の異様の扮装をした俺の一身に注がれる、殊に拳銃に向つて集注せられる、その時の俺の愉快と云つたららない。

（ドウだ偉らいだらう、ピストルを持つてゐるんだぞ、生意氣なことを云つてみる、ズトンだぞ。）

てな顔をして、無暗とソワつく。食事毎に食堂へ出かける、間にも

茶を飲みに行く、停車すれば必らずプラットホームへ飛降りて、散歩するやうな顔をして、其處等中をホウつき廻る、おかげで下ノ關へ着いた頃には、身體疲れて綿の如しさ。詰襟の服もあるね、ゲートルもあるね、水筒・双眼鏡皆あるね、よし／＼飯盒も此の邊にブラ下げてやらう、それからそれ拳銃だ……ない？、どト何うしたんだいッ。

「彼れは貴下、谷本さんから借りたので、歸ると直ぐお返しなさつたちやありませんか、彈丸だけは百十六發ありますけれど。」
 「ははア、左様だつたけね、彈丸だけあつても仕様がなない。」
 拳銃が無ければ武裝にならない、龍を描いて睛を點せざる如き類

である、依つて第一公式の禮装と云ふことに變更。俺の第一公式禮装と云へば、フロツクにシルクハット、エナメルが付いた靴を穿き、白い揉革の手袋をはめて細い洋杖を持つ、なか／＼以て本式だテ。而して恭しく左の胸間、乳より一寸高く從軍記章を吊つて、ヤオラ妻見の前に立つ。

「へ、ン、ごんなものだい、元來俺の身體はフロツク形に出來てゐるんだ、それ見ろ妻君だつて、滿更厭な顔もして居ないぞ」
 スルリと掌で頤の下を一つ撫で、みる。

「兄さん、ちよいと兩手をツボンの衣囊に入れて御覽なさい。」
 「斯うかい。」

「足をちよいと曲げて御覧なさい。」

「斯うかい。」

「さう、それで可いの。ダンスやつて御覧なさいな。」

ぶツ、莫迦にしてらあ俺をチャブリンだと思つてゐる。

記念撮影中止!!。

◎やあーい汚穢屋の勳章

斯ういふ事を云つちや濟まない話だが、實際従軍記章の一つばかり、使ひ場に困るもんだよ、串柿を横に吊つたやうに、七つも八つも懸け並べた中へ、ソツと一つ位二錢銅貨を混せて置く分には、さして眼立たなくて好いけれど……。仍でいろ／＼と考へた末、妻君が

メダルの代りに時計の鎖に附けたら何うかと云つた。

「うん、そいつは名案だ。」

と早速綬を外して、鎖に附けてみたが矢張り可けない。其の理由は、

俺の時計と云ふのは妻君と出合に買ったので、女形だ、だから時計よりも二錢銅貨の方が大きい。

「これちや記章の方を帯にくるんで、時計をブラ下げなければなら
ない。」

と云ふのでベケ。家寶は家寶として佛壇の抽出に藏つて置くことに
決めて、フロツクの胸には懸紐だけを附けて置くことにした、これ
は俺の計略だ、かうして置けば誰だつて、(は、ア彼の男は勳章を持

つてゐるんだな」と氣が附く、而したらより多くの尊敬を拂ふに極つてゐる。(タ、一ツと云ふのは、淋しいもんだね、も一つ此方へ附けておき給へ)と、二つにした。すると妻君は全體の位置が左へ寄り過ぎたと云つた、(ではも一つ右側へ附けておき玉へ)、結局俺は一躍して三個の勳章持であるかの如く見えるやうになつた。尤も用意周到な俺の事だから、法規全集は悉く調べて見ての上だ、フロックコートに勳章の懸紐を一つも附けてならぬとか、幾つ以上附けてならぬとかいふ規則はない、安心なもんだ。爾後これで以て何處へでも大手を振つて出かけて行く、郡長よりも上座へ据えられた時なんか、全く此のちかげだなと思つた。たゞKの如き馬鹿に出會した時だけ

は効がない。

或る會の席上、バツタリ奴と落合つた、するとニヤニヤ笑ひながら寄つて来て、小さな聲で、何を云ふかとおもへば、

「オイ、伯父貴のフロックを借りて來たな。」

「失、失敬なこと言ふな。」

「だつて勳章の懸紐が附いてるぢやないか。」

「オヤ、貴様は俺の勳章を持つてゐること、今まで知らないのかい。」

「知らん、確かに知らんぞ(と立派に言切つたが、少しは消氣たやうだつた)ほんとに持つてゐるのかい、何故吊つて來ないんだ。」

「小供じみてゐるからさ。」

「ふーん、ぢやあ何と何を持ってゐるんだか云つて見ろ。」

「勳四等瑞寶章、緑綬褒章、大正三四年從軍記章……。」

「嘘吐け。赤十字に大禮記念章と、後の一つは何だろな……。」

他の連中(俺と一緒に戦地に行つた)は何うしてゐるか知らと、内々で聞かせてみると、Tの答は恚うであつた。

「さあそれだテ、元來俺は簡易生活實踐者だ、家の中には何一つ無役なものはない、少くも一つの物が二つ以上の働きをしてゐる、第一俺は朝起きるや先づ水瓶に水を一ぱい汲込む、それから夕立の時には、ちよいと貴下、干物を願ひます、妾赤ん坊を寝かしつけてゐるんですからと動員令を受ける、已むを得ぬから直ちに駆出

して、ドシバタ取形付をやるね、静かにして下さいな今寝かゝつてゐるんですからと劍突を食ふね、尤も寝かゝつてゐるのは赤ん坊の方だか妻君の方だか、それは判然せぬ。兎も角家長にして女中の幾分を兼ねてゐる。俺が既に恚うだから他は推して知るべしだ、机は君も知つてゐる通り、一日三度茶舞臺の役を務めるだらう、長靴なんぞ贅澤だつて最初妻君は反對したけれど、彼だつて俺は深き考があつて買ったのだ、雨の日は長靴に限る、それで天氣の好い日は洋杖・洋傘其他細長い物は何でも彼の中に突込んで置く。尤も雨傘の濡れた奴は入れる譯に行かぬから、それは逆さにして蘭の鉢に入れる、玄關を水だらけに爲す且つ給水の手敷を

省く。羅紗刷毛・毛布・扇子等外出に必要な物は一切、山高を仰向けにして中へ藏つておく、これなぞ特に俺の得意な大發明だ、誰かト手品師の帽子みたいだつて、笑つたがね、平氣さ。斯かる間に介在して、獨り彼れ從軍記章ばかりは、悠々懐ろ手をして、何の用も働きをも爲さない、不埒な奴だ。」

とね。A、M、Y、S何れも「俺は逆も彼れを吊げて歩く勇氣はない」と云つた、で俺は最後に、Nなら屹度吊げて歩いたに相違ない、奴が是を吊げて歩かぬといふ法はないと思つた、そこで巧く瞞しつすかしつ訊いて見たら、奴果して一度それを吊げて、妻君の實家へ年始に行つた相だ。

奴の其の時の心理状態は、俺に能くわかつてゐる。

「やあ、叔父ちゃん汚穢屋の勳章を吊げて来た——イ。」

それが實に「お目出度う」よりも先きだつた相である。汚穢屋の勳章は振るつてゐる、逆も尋常一年や二年生の考へぢやないと思つたら、其の家へやつて来る汚穢屋——と云ても其れは地主の息子だが、横須賀の重砲兵に入營してゐて出征した男で、丁度其の日の朝、同じ記章をブラ下げて年始にやつて来たのだ相である。

無論Nも其れツ限り、二度とこれを吊げようとは思はぬと付け加へた。

◎予は如何にして從軍記章を得たるか

これは諸君の最も聞かんと欲する所であらう、俺も亦是非話さねば承知の出来ぬ點である。神尾中將は張村の司令部で、三度々々西洋料理を食つて紅茶を飲んでゐて、從軍章を貰つた人だし、堀内少將は「俺が馬嘶高し唐の秋」とか、何とか何とかで白菊の花ぞ咲きけるてなものを作つてゐて戴いたのだし、山梨少將、此の將軍だけはちつとばかり忙し相だつたか、それだつても半分以上は漢文のお稽古(孫子曰)をして居たに過ぎない、(然らば三平、貴公は何をして居た?)と云ふだらう、自分で白狀しても可いが、「大阪△日」の君が或る本で俺の棚卸しをやつてゐるから、それを拜借して御一覽に供へよう、新聞記者といふものは斯く迄人の一舉一動に注意し

てゐるものか知らと、空おそろしくなるほど何も彼も素破抜いてゐる、見て呉れ玉へ斯うだよ。

陣中に於ける多々良三平

- (イ) 死ぬか生きるかといふ陣中にあつても磨き立てのキツトの指先の細いのを穿いて澄あしてゐる男
- (ロ) 砲彈が唸りを立て、頭の上へ飛んで來ると生命よりも先づ綺麗に分けた髪の毛を氣にして頬りに撫でつける男
- (ハ) 毎日髯を剃つてゐる男
- (ニ) 三四町歩行くと最う足が痛むと云ひ出す男
- (ホ) 其の疲跛引きく戦線を五里でも十里でも歩行く男。

- (へ) 小さな軀をして官給の荒くたい糧食を随分無遠慮に詰こひ男をとこ
- じ男をとこ
- (ト) 其の癖不味の美味いのつて贅澤をいふ男をとこ
- (チ) いつも上等の蓑を自慢さうに吹かしてゐる男をとこ
- (リ) 慌てるべき筋合のことであつても馬鹿に慌てないでゐる男をとこ
- (ヌ) 寒い、といふと人の帽子でも外套でも直に徴發する男をとこ
- (ル) 美しい顔をしてゐて女のことを餘り口にしない男をとこ
- (ヲ) 何でも自分勝手に決めてしまふ男をとこ
- (ワ) 紅茶にウキスキーを入れて舌鼓を打つてる男をとこ
- (カ) 人の驢馬に乗つて落ちこちる男をとこ

- (目) よく朝寝坊をする男をとこ
- (タ) じつとしてゐて能く色々な材料を聞だしてくる男をとこ
- (レ) 屢々蝸に威かされた男をとこ
- (ソ) その蝸(一寸位の虫)をブローニングを擬して征伐した男をとこ
- (ツ) ちつとも手紙を書かなかつた男をとこ
- (ネ) 瓦のかけや何かを時々集めて喜こんでゐた男をとこ
- (ナ) よく菓子を食べる男をとこ
- (ラ) 寝てゐるかと思ふと飛んでもない時に起きて原稿を書いてゐる男をとこ
- (ム) ピールを喇叭呑みにする男をとこ

(ウ) でも一寸一二度は周章てた男

(キ) 開城後青島に這入るとプリンツ・ハインリツヒ・ホテルに日参して其の度葉巻を買つた男

(ノ) (オ) (ク).....

(ス) 下關へ歸つた時先陣の魁に功名手柄をした男

大畧斯くの如くにして、俺は從軍記章を頂戴するに至つたこと、正に相違無御座候だが、説明が簡單で讀者諸君には意味の通せぬと思はれる點が二三ある、其の點には註釋を施こし、且つ未だく此の外、それこそお釋迦様でも御存知のない奇劇が澤山にあつた、その一つ二つも、最早白狀して好い頃だと思ふんだ。イザヤ語らん近う

近う。

◎慌てるべき筋合のこと

「下關に於ける先陣の功名」、こいつ素的に面白い話なんだけれど、まあ止して置かう、發賣禁止になると東文堂君に氣の毒だから……、加之俺は女のことを口にしない男なんだもの。それから(リ)と云ふ處を見てくれ給へ、慌てるべき筋合のことであつても何とか彼とかとあるだらう、諸君！凡そ世の中に、「慌てるべき筋合のこと」つて、そんな事があるものですかね？、初耳ですせ「急ぐべき」とか、速かに處理すべき」とか云ふ事は随分有りますよ、然し慌てふためかなければならぬといふ、そんな事件が抑も……、奴確かに憤慨し

てゐるんだ、其の事件といふのは斯うなんです、何方が無理だか聞いてくれ給へ。

それは俺達が戦地に到着して、漸く一週間ばかり経た頃の出来事で、張村と云ふ處に司令部が在つて、俺達の仲間二十人ばかりも其の張村の支那家屋に分宿してゐた、例の支那一流の厚い土壁を以てめぐらされた家で、五六軒同じ様な形式の家が建並んでゐる一番端の、張村河に近い家が我々の宿舍であつた。俺とOとKとYとMとUと、それから炊事當番の兵隊さんと都合七人が、此の一軒の支那家屋を一時の金殿玉樓としてゐた、尤も風の日には風が吹込むし、雨の日にはドシ〜雨が流れ込むと云ふ金殿玉樓である。



大略かういふ室割であつた、室と云ふのは例の温床で、土間より二尺ほど高くなつてゐる、中央の卓子は一同が食事をしたり、寄つて馬鹿話をしたりする處、椅子は無いからトランクを縦にしたり、水瓶を逆さにしたりして代用する。入口の扉は観音びらき。採光が悪

いから屋内は晝間でも仄暗く、殊に土間の奥の方は眞闇なりと知るべし。

此の朝、KとOとが大喧嘩をやつた、Oは身長こそ五尺六寸もあるけれど、極く大人しい男で、Kはチビの癖に荒つぽい男、殊に酒を飲むと半分狂氣のやうになり、且つ動ともすればピストルなどを拈くり廻す癖のあつた男だ、此の朝も俺の大切なウキスキーを、同室の誼みと云ふので勝手に持出して、半分ばかり平げた結果が、此の大喧嘩をおつはじめたのである。俺は最初一寸仲裁を買つて出ようかとも思はんでなかつたが、イヤ／＼折角喧嘩をしてゐる腰を折つちや相済まぬと考へ直して、新しく葉巻に火を點じて、卓子に腰

かけながら悠々見物にかゝつた。頼母しい人間ぢやろ。

見るに見兼ねて、遂々Mが飛び出した。仲裁にはないよ、喧嘩を買つて出たんだ、蓋しOとMとは同社だ、Oの喧嘩振りが煮え切らぬのを齒痒くおもつて、Mが代つて引受けたのだ。

(はゝア、大分面白くなつたぞ)

(是非、かう來なくちやならぬ所だ。)

誰しも口にくそ出さぬが、皆そんな面付をして、相變らず見物してゐた。此の喧嘩の問題に就て、是非曲直を判別し得る者が(即ち非が攻撃するKに在るか、將た攻撃するOに在るかを)タツタ一人ある、それは某砲兵中佐で張村から二里餘を離れた巫山後と云ふ

處に居た。結局二人で其の中佐の許に行つて、是非曲直を分ると云ふ事に決した。Kは叫んだ、

「可いか、俺は宣告して置くぞ。若し△△中佐が俺の言に裏書したら、俺は一發の下に貴様を撃殺すぞ。」

Mも負けずに怒鳴つた。

「諾。その代り貴様の言ふ處に少しでも偽があれば、俺が貴様を其の通にしてやる。」

兩人は拳銃を腰に付け、驢馬に乗つて出て行つた。

「二里も風に吹かれて行く間には、酒が醒めてしまふだらう。」
誰しも然う云つて、深く注意する者はなかつた。

◎憲兵隊から一寸来い

それから約三時間を経た、舎内にはタ、俺とOとのみが残つてゐた、俺は自分の室で原稿を書き、Oは大テーブルの上で寫眞の種板を洗つてゐた、外に一人隣の宿舍のSと云ふ男が、Oの傍で油を賣つてゐた。タツタツと驢馬の蹄の音がした、と思ふと天にも響けとばかりの大音聲、

「さア何うだOの畜生ツ!!、Mは約束通り一發で殺して來たぞ、今度は貴様の番だ、斯うなりや誰彼の用捨はないツ。」

「吁ッKだ!。ドダンバダンと入口の扉を閉める音がした、Sは飛鳥の如く後ろの高窓から飛出して行つた。——實際彼の高い窓が何うし

てSに飛越えることが出来たか、俺は不思議で堪らなかつた。て翌日Sを引張つて来て、「も一度此處から飛んで見ろ」と云つたら、Sの奴苦笑しながら、

（此處所飛べるもんか、降参つた〜）と頭を搔いてゐた。——此のSの高窓を飛んで逃げたといふ事實が、俺の頭に電光の如く、
（容易ならぬ事件だ。）

と云ふことを感せしめた。俺は起つて土間を覗いた、Oは一生懸命で入口の扉に獅噛み付いてゐる。次で俺は窓から外を覗いた、Kの姿は見えないがエンヤ〜と掛聲をかけて扉を押し、また焦れてトントン靴で蹴つてゐる。それから納屋の壁には、當番の兵隊君が眞

蒼な顔をして、蜘蛛のやうにビタリとくつついてゐる。

「多々良君、多々良君、早く来てくれ、一寸来てくれッ。」

とOは叫んでゐる（其の聲や正に悲鳴に近い）。此の場合の事さ、Oが「慌てるべき筋合のこと」て云ふのは。俺が周章狼狽の極、温床から轉げ落ちでもしたら、奴屹度満足したに相違ないんだ。

俺はOの悲鳴に近き聲を耳にしつゝ、バツと隣寸を擦つた。何の爲だと思ひ給ふ？、スリツバを探したんだよ、スリツバは直ぐ目つかつた、そこで其れを密ツと取り上げて、逆さにしてトントンと靴脱ぎを叩いてみて（中に蝸が潜んでゐると可けないから）、然る後其れを穿いて、悠々濶歩して入口へと行つた。

〔何て圖々しい、落付いた奴だらう。〕

と憎んでは可けない、かうしてゐる間に俺は此際自分の採る可き最良の手段を決定したのだ。而してそツと扉を押さへると同時に、早く逃げる)とOに眼で知らせた、Oは(有難い、此の御恩は一生忘れん)てな顔をして、例の高窓を越えて飛んで行つた、五尺六寸もあるOが此の窓を越えることは毫も不思議はない、但し窓を越えてからが見物だつた相だ、奴のは駆けるんでなくて、空中を泳いで行つたさうだ、師團司令部まで二町ほどの間を……。Kの奴は相變らずエンヤ／＼をやつてゐる。暫らく押合つてから、俺はつと左の手を放した、バツと扉が一枚だけ開くと、不意を食つてKの右半身が

トツトツと屋内へ流れ込んだ。(占たツ)と俺は猛然Kに飛びかゝり、矢庭に拳銃を奪ひ取つた。そして直に筒先を覗き込んだ(多少の疑ひを持つてゐたので)。

「何あんだい、君かあ。アツハツハツ。」

「何あんだい、中は空なのかい。アツハツハツ。」

斯うなると一寸の間宿替をしてゐた俺の持前の茶目公がムク／＼と頭を擡げて来て、直ぐにKに拳銃を返して、

「その窓から逃げたんだ、それ追つかける！」

と、おセツかいにも踏臺までこしらへてやつたものさ。

Kは憲兵隊から一寸來いをやられて、大眼玉を頂戴し、Oは持病の

心臓病を起して、一週間はど野戦病院の御厄介になつた。Mは何うしたつて？、二人は途中で笑ひ出して、「ちやア失敬」をやり、Kが一足先に歸つて来て此の茶番を演じたのである。

◎ヒヤーズ征伐

話は少しく溯ぼる、俺達が張村に着いた最初の夜の出来事。

「宿舍の設備は整へて置いたから」と云ふお達しを受けて、やつて来て見れば、その設備といふのが皆目見當らない、さんぐ探した揚句、結局、

「これだらう、設備と仰在りけるは。」

と云ふことに極まる、蓋し温土呂の上に一寸ほどの厚さに藁が敷い

てある。馬になつたやうな気分で、ゴロリと其の上へ轉がつて兎も角も寝に就いた。上衣とツボンだけは脱いだ、足には靴を穿き、手には革の手袋をはめ、顔は風呂敷で包んで。山東省には蝸が多いから注意しろと、豫て言渡されてゐたからである。蝸は即ち蛇蝸の蝸、命取りの毒蟲だ、土人はヒヤーズと呼んでゐる。

遠くの方にドカン、ドカンを聞きながら、早やゴウくと眠りに入る、大砲の音に寝かし付けられるなんざ、全く壯快極まりない。夜半、不圖眼が覺めた。

窓格子の際に立てた十夕蠟燭は、早や燃え盡きんとして、紙の破れ目をもる、秋風に、火の穂はゆらゆらと揺れて、張村の夜は死ん

だやうに寂かである。

かさ、かさ。かさ、かさ。

（はてナ何だらう？、怪しき物音。は、あん、蟲が障子の紙を這てゐるのだな）と考へると同時に、不圖俺の頭に閃いたものは、例の蝸だ。船の中で讀んだ「從軍三年」に、蝸が壁の新聞紙を這ふ音が丁度こんな風に書いてあつたぞ、こりや油斷がならぬ哩と、ガバと弾ね起きて、ジツと窓格子を睨めつけた。

かさ、かさと言させつゝ、聽て其の破れ目から、悠然と現れ出でたる物こそ、頭部はシャコの如く、鉄は甲蟲の如く、體は百足蟲の如く、尻尾は龍の落し子の如く、全體の色は銅に似たり、俺は未だ蝸

なるものを見たことはないんだが、此の如く怪しからぬ圖體を爲せる者、蝸にあらすして何ぞやと、それが蝸であることを直覺した。蝸は、鉄を振りつゝ、そろりそろりと壁を傳つて進撃して来る。（己れ、やれ、此の畜生が。）と手は拳銃にかゝつたが、一寸待つた、如何に鼻惡非道の動物とは謂ひながら、多寡が二寸の蟲だ、牛刀を以て鶏を割くと何れぞや、蝸にピストルなんか世間の聞こえもよろしくない、そこは生死の境に立ち乍ら燐寸を擦つてスリツバを索むる先生だ、慌てるもんか。小刀…錐…箸…手頃の武器は無いかと、洋服の衣囊から雜囊の中まで大急ぎで引掻きまはしたが、斯麼時に限つて決して有るものではない。

蝮は遠慮なくだん／＼壁を下りて来る、これを降り切つて、下敷の藁の中へ潜り込まれたら一大事だ、(一寸待つてくれろ、蝮君)と呼んでも、奴輩者なんかしら、盛んに鉄を振つてゐる、俺を威嚇してゐるんだな？ 馬鹿ッ。

漸くにして鑢切器を發見した、これを斯う正眼に構えて、さあ最う百人力だイヤ来い來たれと、其の突端で頭を抑へ付けた。奴驚ろいて、鉄で鑢切器を拂ひ退けやうと試みたらしいんだが、其の無効なるを覺るや、今度は尻をピヨンと曲げて鑢切器に突貫した、八股の大蛇みたいに尻に劍を持つてゐるんだ。これが俺の指でもあつたら、蝮君の注文通りぶつと膨れ上るんだらうけれど、鑢切器だから

(オイ櫛ぐつたいぢやないか)位のところだ。下から蠟燭の火を當て、火烙りの刑に處し、コンガリと狐色に焼きつけた。

一段落となつて、さてKはと見ると、グウ／＼心持好き相に寝てゐる。俺は何でだか、自分の働いてゐる時に人が寝て居たりすると、癢で堪らん、殊に此のグウ／＼が癢だ、相當の制裁を加へてやらねば男が立たぬやうな氣がする。そこで密つと毛布をまくつて、襦袢の合せ目の處へ蝮の死骸を半分ほど突込んで置いて、

『オイ起きんか、コラおい。』

とKの頭を拳骨で一つガンとやつた。うゝゝイてなことを云つて奴眼を覺した。

「起きろく、蝸が落ちた、蝸だ、天井から、バタリと、君の枕の
 邊だ。」

俺が先に立つて慌て、見せるもんだから、蝸の一聲に奴ガバと跳
 き起きの、俺が蠟燭をさしつける、「何處だく」と狂人のやうにな
 った葉の間をのぞき込む。

「やッ、居ろく、貴様の胸だ。そらッ、大變だ、食付くぞ、死ぬ
 ぞ。」

斯んな場合は何でも好いから、手當り次第の言葉を投げつけて、
 敵に考へるとか看るとかの餘裕を興へないことだ。

「ウワー、取つてくれく。」

「取てやるが、ウキスキーを一本遣こすか何うだ。」

「遣るよく、早く取つてくれッ。」

俺は二本の指で蝸を摘まうとした。

「危ぶないッ、手ちや可かんく。」

頼母しき友よ、斯かる際にも俺の手をかばつてくれるか。だから
 俺は彼のピストル事件の時にも、憲兵隊へ謝罪に行つて引取つて來
 てやつたんだよ。

蝸の死骸を翌朝師團の軍醫部へ寄贈すると、早速酒精漬となり、返
 禮として葡萄酒が一本到來した。

「へん、さういふ次第なら、もつと出るく。」

◎否、ウリは申上げません

何と云つても一番困つたものは、食物であつた。監理部から附けられた當番（從卒みたいなもの）と、自分達で雇入れた支那人とを使つて、自炊生活をやつてゐたのだが、平素勝手元の事など、縦のものを横にもした事のない連中の寄合だから、随分そりや滑稽な出来事もあつたが、餘り奇抜すぎるのは作り事のやうで却つて面白くない。監理部から日々供給されるものは、一人前白米二合ばかりと麥が少々、一片の山東牛の肉と、菜葉が何匆か、三度が三度極まつて夫れだから、やり切れない。白菜は山東白菜の本場だから牛に食はせる程有り相なもんだが、兎角に出し惜しむ、葉先の黄色く

なつたのなどを配りつける。牛肉と來たら、我々が「鐵筋ビーフ」と命名してゐたと云ふ一事で解るだらう、實際ダシより外には使へなかつた。

従つて牛肉其他副食物の材料は、監理部以外に求めねばならなかつた。幸ひなことには、俺の宿舎にはYと云ふ極く重寶な男が居た、日露戦争に騎兵上等兵をして居たと云ふので、十年後の今日尙ほ背廣に長靴を穿いて、拍車を附けて歩かうといふ男である、而して戦後専ら滿洲邊をホウつき廻つてゐる男だから、支那語（と云ても滿洲語だけれど）も上手にしやべれば、料理などなか／＼器用にやる、も一つ重寶な事は、煽てれば何でもやる男だ。仍で俺達は協

議の結果、此の満洲大人を「宿舎長」に奉まつつ、それは表向き、内實は高等も三ごん兼コックてな者に任命した譯サ。

忠實なる宿舎長閣下は、雨が降つても風が吹いても、厭はず毎日當番又は支那人を連れて、鶏や玉子の買出しに行つてくれた、或る時は柳樹臺を越えて、八里もある王哥庄の酒保へ泊りがけで出かけて、麥酒、サイダー、ペバメント、ウキスキー、砂糖、菓子、葉巻などをシコタマ仕入れて來たりもした。又鴨なごを買つて來て、陣中では神尾將軍すら召上がることの出來ない鴨飯を焚いて、一同に舌鼓を打たせたこともある。鹽鯛を買つて、怪しげなうしを吸はせたこともある、甘藷を堀つて來てきんとんを拵へたこともある。

實際俺達は額をビチャ／＼叩いて、又と得難き良コックを得たことを相慶賀したのである。—その代りには、先生の書いた頗る付の拙い、齒の浮くやうな美文的通信文を読み聴かされても、冷笑かしたり、噴飯したりしてはならなかつた、ジツと噛み殺して、

「巧いなア、實に、其處ンところが素的だね、え、君圈點を附けてやり給へナ。」

位のこととは是非言はねばならなかつた、それが又大抵俺の受持だつたが、そんな事は俺に取つては實に軽い負擔さ。

然しながら、時とすると、俺達の頭上にも動員令が降つた。

「今夜これから、葱を徵發に行くから、皆な一しよに來い。」

一番手に入れ難いものは野菜だ、それは大抵の野菜畑は監理部で買ひ上げてゐる爲め、なかく金づくでは俺達の手に入らない。公娼を廢止すれば私娼が殖える、それも干渉すれば、結局強姦のやうな犯罪が増加するだらうと論じて居た人があつた、だから娼妓藝妓の類は可愛がつてやらないと可かんテ。野菜も金で手に入れることが出来ないとなると、勢ひ他に工夫をめぐらすより外に途がない。斯ういふ事にかけては殆んど天才とも稱すべき滿洲大人は、晝間ぶらりと散歩に出かけても、たゞ漫然とホウついてゐるのではない。

（はゝあん、彼の垣根には藤豆がある、その溜池には蓮根がある、川の向ふの低い處は葱畑だナ。）

とちやんて捨て目が使つてある、で夜に入ると、大きな籠を抱えて、我々雑兵を引率して菜集に出かけるのぢや。

「宿舎長閣下！、こりや可かんよ、監理部用といふ立札が建つてるぜ。」

と、手を引込ませる正直なものも居ます。流石に宿舎長は落着いたものの。

「ナニ關ふものか、どうせ監理部だつて一束三文で買上げたんだ、太い奴だ、此んな上等の野菜を持つてゐながら、俺達の方へは萎びた菜つ葉よりほか何にもよこさないんだ。遠慮なく徵發して好い。俺が引受けた。」

其の癖目つかつたら一番先きに、俺が逃げるつて云ふ面付でござい。
 大きな竹籠にはち切れるほど、新鮮な野菜を満たして、ワツシヨ
 イワツシヨイと歸つてくる時の、元氣の好いつたら。
 「四番の宿舎は、何時も好い野菜を澤山持つてるが、不思議だなあ。」
 と外の宿舎では首を傾げてゐた。えへ、お釋迦様でも……此なこと書いちまつて従軍章を取上げられないかしら？。俺はタツタ二度しきや行かないよ、藤豆を一度、葱を一度、それもほんの少々ばかり、否決して嘘は申上げません。

お釋迦様でも御存知なかる 終

大正八年十二月二十一日印刷
 大正八年十二月二十四日發行

定價 金七拾錢



著作者

多々良三平

發行者

東京市外中濠谷町二百四十三番地
 小林直太郎

印刷者

東京市麻布區谷町七十三番地
 宮崎兼三

發行所
 賣捌所

東京中濠谷
 二四三
 神田

東京文堂
 東京堂

◎奥野他見男氏著

近刊 縮刷 大學出の兵隊さん
合本 大學出の兵隊さん
合本 兵隊さん

菊牛ポイント活字・約四百五十頁・定價九十錢・郵税八錢

◎「大學出の兵隊さん」は著者をして今日あらしめたる空前の名著にして萬天下知らざる無き不朽の書、原本既に六十版!!

◎同上であります物語は其の後編にして前者に比し筆致愈々酒脱の妙を極めたるもの。今や後世に遺す爲め合冊美本として世に出せり。

拾壹月拾日發行

奥野他見男氏著 (第十三版)

他見男と物語

定價七拾錢 郵税六錢

- ◎幾多の著書中著者の寫眞入は本書のみ!!
- ◎之れ萬天下の熱望せる所著者遂に發表す!!
- ◎文と人と相俟て興趣いやが上に深し

▲土曜から日曜の姉妹篇▼ 松川二郎氏著

近郊探勝日がへりの旅

三六版三百餘頁 定價金壹圓

本書の内容概略

東京の東の郊外 同西の郊外 同南の郊外 同北の郊外 川崎大附
 磯の海岸 大宮津 横濱見物 大栗橋 水道 了古薩 沼間神武寺 横須大
 賀の軍港 那須高原 水海道 所澤の紅葉 小僧道鏡の墓 宇都都
 宮の能天覧 山狭川 右岸の地多 高尾山の紅葉 鎌倉の街道 塚原古戦場 金井
 飯能の近海 多摩川 沼多 勝川 左岸の泉 成田の松倉野火止 野市川と山中
 山一覽 稻毛海 水浴場 山印 旗沼 賀沼 大東の泉 成田の松倉野火止 野市川と
 三州里牧場 北條の山 穴手 熊谷堤 赤鬼の泉 成田の松倉野火止 野市川と
 崎及其附近 磯吉見の山 泉 妙義山 赤城山 瀨川の上流 前橋と古碑 桃林
 秩父赤壁 粕壁 山部 館林 霞ヶ浦 筑波山 瀨川の上流 前橋と古碑 桃林
 諸の本場 武甲山 河原 霞ヶ浦 筑波山 瀨川の上流 前橋と古碑 桃林

發行所 東文堂書店

松川二郎著(忽ち三版)

三六判クロス製 定一圓廿錢 送料十銭

旅一泊 土曜から日曜

山海へへ!!!

東は房總の沿岸、北は松島、善光寺、輕井澤、西は濱名湖、諏訪湖、南は伊豆大島を境として、土曜から日曜にかけ一泊の快遊を試むべき名所舊跡を悉く網羅し、著者會遊の想ひ出を辿り快筆に従つて、山容水態は絢爛油繪の如く清艶水彩畫の如く、將た古淡墨繪の如くに讀者の眼前に展開し來らん、而も各章附するに交通の状況旅館の良否、宿泊料、人車馬賃の徴に至る迄懇切丁寧に案内せられたる旅行者必携の書なり。

發行所 大賣捌

東京中澁谷宇田川橋前
振替東京七八六四番
東京市神田區表神保町
振替東京二七〇番

東文堂 東京堂

◎奥野他見男氏著 (第卅三版)

諷刺諧謔 先生様と生徒

△種珍彙判中裁形三百余頁 ▲定價金四拾五錢郵税四錢▲

これでもかくと追ッ駈けて來る様な面白さ！可笑しき筆致の輕妙、着想の奇拔、文の諷刺滑稽洵に當代一品!!! 切に御愛讀を薦む。

◎奥野多見男氏著

(第十九版)

蛸のあたま

定價金七拾五錢
送料金八錢
ポイント活字
上製美本
二百八十餘頁

新刊 早くも英譯に着手

著者が著書の賣行の激甚なる蘆花漱石と比せられつゝあるは人皆よく知る。本書は益し従前の著書より嶄然として頭角を抜くの傑作にして諷刺あり警句あり上品なる滑稽あり興趣滾々として盡きず、某氏の如きは早くも英譯に着手せり以つて知る可し。

◎奥野他見男氏著

(第廿四版)

逢ひたい見たいは 山々志れど

定價七拾錢
郵便六錢

- ◎善良なる著者を新橋赤坂と誘ふた悪友は大學の某助教。
- ◎藝者と相撲取片ツ端から薙ぎ倒し「色男でも力があるぞ!!」
- ◎「ねえ、あたし貴方を好いたわ」と寄り掛れば、
- ◎「へん、己れは精神が確つかりしてゐるから欺されんぞ!!」
- ◎此の筆、此の想、流石は日本一の諷刺滑稽文學者。

◎奥野他見男氏著 (第十八版)

凸坊先生

菊判半紙型 ● 定價 四十五錢 洋裝本 ● 郵税四錢

世の中にこんな面白い噴き出させる本は何處を探してもない、著者の軽い奇抜な筆致は日本で知らぬ人はない位有名です、その上悉く眞實を書いてあるんだからその面白さ、誰だいな傍でクツクツ、轉がつてゐるのは。

◎奥野他見男氏著 (第廿四版)

初旅の凸ちやん

△袖珍菊判半紙形三百余頁▲此價金四拾五錢郵税四錢▲

可愛い、やら小面憎いやら癩に障るやら。著者の筆致の輕妙、諷刺は既に天下に公評あり。大人でも小供でも片ツ端から轉げ倒させねば止まぬ滑稽さ！面白さ！善良なる家庭に持つて來いの好讀物なり。

◎奥野他見男氏著

(第十七版)

娘の顔も目に三度

定價 七拾六錢
郵税 六錢

◎愈々出で、益々面白し!!

◎全文潑刺として躍るが如し!!

◎著者の名聲今や海外に及ぶ!!

◎天下舉げて著者が新刊を待つ。

◎奥野他見男氏著

(第廿四版)

大學出の 兵隊さんであります物語

定價 四拾五錢
送料 四錢

見よ大正の文壇を震撼せしめたる彼の有名なる「大學出の兵隊さん」の出世物語でたり、筆致愈々圓熟、着想益々非凡、興味正に絶頂!!

◎奥野他見男氏著

(第六十版)

空前の
大評判

おへその宙返り

△袖珍判半截形三百余頁▲定價金四拾五錢郵稅四錢▲

面白い！面白い！なんとも云へぬ面白い、佛頂面ぶつちようづらで名高い某博士も之を披ひらくが早いか思はずアツと噴ふき出し「成程なるほどへそが宙返る哩」と。筆致ひつちの輕妙けいめう、想おもの奇拔きはつ、萬天下まんでんかを驚駭きやうがいせしめたる名著めいしやうなり。

◎奥野他見男氏著

(第廿六版)

最新刊

博士様おら娘をやるか

△袖珍判半截形三百余頁▲定價七拾錢郵稅六錢▼

- ◎出たぞ、出たぞ。
- ◎悉く事實!!
- ◎面白いのなんのつて!
- ◎某博士曰く「此奴めが、此奴めが」

◎奥野他見男氏著

(第十五版)

あゝの山戀し 海戀し

——菊判紙更紗表紙紙張數四百頁、挿畫八枚 價七十五錢郵税八錢——
詩の島戀の島伊豆は大島乙女に口説かれて大に色男がり、或は伊香保
に遊んで此景勝の地浪子豎に穢されたるかと思憤し、其他日本アルプ
ス、飛騨の山水、伊豆半島、赤城山上湖畔の一夏、箱根の幽境、中隱
寺の月夜等氏獨特の筆致は觀察の巧妙と相俟つて躍々として活き動く
所を知らず陳腐なる案内記類を排して敢て此の快著を薦じ、

121
127

終

